

氏名	藤井 雅文
学位の種類	博士（体育スポーツ学）
学位記番号	第6号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	令和2年3月24日
学位論文題目	自己調整学習能力の高い大学野球選手を育てる指導方法の探求
論文審査委員	主査 前田 明 副査 高橋 仁大 副査 坂本 昭裕 副査 中本 浩揮

## 論 文 概 要

自己調整学習能力の高い大学野球選手を育てる指導方法の探求を主題とし、大学野球選手の自己調整学習能力を向上させる具体的な指導事例を提示することを最終目的として研究を実施した。まず、一般的な学習場面において重要とされている自己調整学習能力は、大学野球指導現場においても同様に重要な能力といえるのか調べるために、大学野球選手500名以上を対象に自己調整学習能力とチーム内立場の関係を明らかにした（研究課題Ⅰ）。加えて、チーム内立場は単純に練習の量によって決められる可能性があるため、チーム内立場と自主練習時間の関係を明らかにした（研究課題Ⅰ）。また、自己調整学習能力は一般的な大学野球生活を通じて培われる能力であるか調べるために、学年間における自己調整学習能力の差異を明らかにした（研究課題Ⅰ）。続いて、いかなる競技レベルのチームにおいても、自己調整学習能力が有用な能力であるか確かめるために、チーム競技レベルがランキング化されている高校野球選手を対象に、チーム競技レベルと自己調整学習能力の関係を明らかにした（研究課題Ⅱ）。さらに、指導者の介入が選手の自己調整学習能力に影響を与えるかどうか調査するために、指導者の運営決定権の委譲スタイルが選手の自己調整学習能力に与える影響を明らかにした（研究課題Ⅱ）。そして、選手の自己調整学習能力を向上させる具体的な指導事例を提示するために、実際に選手の自己調整学習能力を向上させているA大学野球部を対象に、PDCAサイクルの形で指導事例を報告した（研究課題Ⅲ）。最後に、自己調整能力を向上させる指導が、競技パフォーマンスの向上に対してもプラスに働いているか確認するために、自己調整学習能力と個人パフォーマンス及びチームパフォーマンスとの関係を明らかにした（研究課題Ⅳ）。

研究課題Ⅰでは、大学野球選手500名以上を対象に自己調整学習能力とチーム内立場の関係を調査したところ、スポーツ版自己調整学習尺度の得点はレギュラーメンバー、ベンチメンバー、ベンチ外メンバーの順で高い値を示し、チーム内競技レベルを決定付けるの

は、自己調整学習能力が一つの要因である可能性が示唆された。また、自主練習時間はチーム内立場で差がないことが明らかになり、チーム内立場の決定は単純な練習の量よりも、同程度の練習時間内でいかに成長するかが重要な要素であることが示唆された。従って、研究領域で盛んに言われている自らが考えて練習等に取り組むための自己調整学習能力は、大学のスポーツ指導現場でも重要な能力であることが示唆された。また、学年と自己調整学習尺度の関係を調査したところ、学年間に有意な差は認められなかったことから、大学野球の活動や指導を普通に行うだけでは選手の自己調整学習能力は培われない可能性が示唆された。

研究課題Ⅱでは、いかなる競技レベルのチームにおいても、同じチームに所属しているメンバー内でのパフォーマンスを決定付けるのは自己調整学習能力が一つの要因であることが明らかになった。そして、研究課題Ⅲで自己調整学習能力を向上させるために指導事例を提示する前に、指導者の介入がそもそも選手の自己調整学習能力に影響を与えるかどうか調査した。そこで、数ある自己調整学習能力を高める方法の中で、多くの指導者が行っている運営決定権の委譲に着目して、運営決定権の委譲スタイルと自己調整学習能力の関係を調査したところ、「相互委譲」、「選手主導」、「相互主導」、「指導者主導」の順で自己調整学習尺度総合得点が高いことが示され、選手主導のチームと指導者主導のチームの間には有意な差が認められた。しかし、運営決定権の委譲スタイルによる自己調整学習能力の差は、予想とは反してはっきりとしたものではなく、選手の自己調整学習能力は単純に運営決定権がどちらかにあるかだけでは説明できないと推察された。

研究課題Ⅲでは、選手の自己調整学習能力が向上した A 大学野球部の指導事例を PDCA サイクルに基づいて報告した。A 大学野球部の活動の中で、自らを振り返る際に使用するマイルストーン（振り返りシート）、自分の能力を数値化する各種測定テスト、今後の計画などを明確にするために行う監督との個人面談が選手の自己調整学習能力を向上させる主な活動であることが明らかになった。その他には、上のレベルを体験することができる社会人野球との交流が自己調整学習能力の向上に効果があることが明らかになった。つまり、自己調整学習能力の高い大学スポーツ選手を育てる指導方法として、選手に振り返りをさせること、選手に努力の方向性の是非を示すこと、選手が外部と触れ合う機会を作ること、この 3 点を選手と有効なコミュニケーションを取りながら実施することが重要であると示唆された。一方で、選手の自己調整学習能力の向上に寄与すると予想した野球教室が、予想とは反して自己調整学習能力の向上にはあまり寄与していない結果であった。成功を収めるために指導者が介入する活動よりも、選手の成長を見守る形で指導者が介入する活動の方が、自己調整学習能力の向上に対する寄与度が高い活動であることが見受けられた。

研究課題Ⅳでは、自己調整能力を向上させる指導が、競技パフォーマンスの向上に対してもプラスに働いているか確認するために、4 年間の活動で自己調整学習能力が向上した A 大学野球の個人パフォーマンスとチームパフォーマンスを調査した。その結果、スイング速度、投球速度、メディスンボールスロー（後、右、左）の個人パフォーマンスが有意に向

上したことから、自己調整学習能力の向上は個人パフォーマンスの向上にプラスの影響を与える可能性が示唆された。また、チームパフォーマンスについては、リーグ戦の結果から飛躍的に向上したことが明らかになった。従って、個人パフォーマンスが向上することで、チームパフォーマンスが向上し、チーム成績が向上した可能性が示唆された。

今後は、自己調整学習能力を向上させるための指導方法を汎用的に活用できるようにするためにも、様々な競技や年代での事例研究を重ねる必要がある。

## 論文審査の要旨

本研究は、自己調整学習能力の高い大学野球選手を育てる指導方法を探求することを主目的とし、以下の3つの研究課題にて構成されている。

研究課題Ⅰでは、競技レベル別、年齢（学年）による自己調整学習能力の違いを横断的研究にて明らかにした。

研究課題Ⅱでは、野球チームの運営決定権の委譲について、チームの指導者と選手を対象に調査し、運営決定権の委譲のタイプ別の区分と自己調整学習能力の違いを明らかにした。

研究課題Ⅲでは、自身が指導する A 大学の野球選手を対象に長期にわたる縦断的研究により、チーム活動の実施と自己調整学習能力がどのように変化していくものか確認する事例研究を行い、その効果を明らかにした。

研究課題Ⅳでは、自己調整学習能力が向上した A チームのパフォーマンス、個人のパフォーマンスがどのように変化したか明らかにした。

上記の研究結果から、横断的、縦断的手法により、自己調整学習能力の高い大学野球選手を育てる指導方法をまとめており、その成果を明らかにした本論文の内容は博士（体育スポーツ学）の学位論文としてふさわしいものであると判断する。